

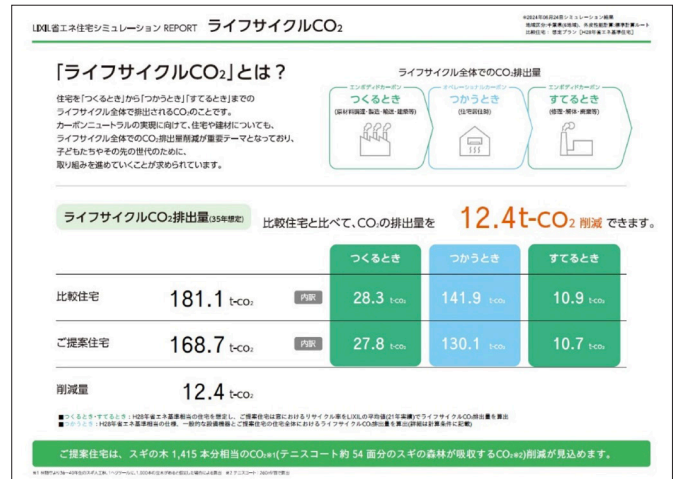


## TOPIC 1 | 業界初のLCCO<sub>2</sub>簡易算出ツールを開発

業界初となるLCCO<sub>2</sub>簡易算出ツールをLIXILが開発、提供を開始した。同社のプロユーザー向け設計支援ツール「LIXIL省エネ住宅シミュレーション」に、住宅全体のLCCO<sub>2</sub>排出量を評価できる「すまいのライフサイクルCO<sub>2</sub>簡易算出機能」を追加した。

「LIXIL省エネ住宅シミュレーション」は、住宅の各部位の面積や、窓の種類・サイズ、断熱材の種類などの必要な条件を入力すると、外皮性能から一次エネルギー消費量の計算までを一気通貫で行える。新たに追加した機能は、建設や開口部の製造にかかわるCO<sub>2</sub>排出量の計算を組み込むことで、住宅の「つくるとき・つかうとき・すてるとき」トータルでのLCCO<sub>2</sub>排出量を算出することができる。

従来通りに必要条件を入力し、外皮性能や一次エネルギー消費量の計算をした後、提案書作成時にLCCO<sub>2</sub>の算出を行うことができる。LCCO<sub>2</sub>設定画面で、長期優良住宅の取得有無や劣化対策等級、外壁や屋根などに採用している建材の種類などを選択すると、従来の提案書に加え



LIXILが新たに追加した「すまいのライフサイクルCO<sub>2</sub>」の提案書

で、「すまいのライフサイクルCO<sub>2</sub>レポート」と「おすすめの窓提案書」を作成できる。レポートでは、平成28年省エネ基準の住宅と、建設予定の住宅を比較して、LCCO<sub>2</sub>の排出量をどれだけ削減できるかをつくるとき、つかうとき、すてるときに分けて表示。スギの木のCO<sub>2</sub>吸収量でどれくらいになるかの説明も記載する。

## TOPIC 2 | 構造用面材の割合が増加、合板は北海道、北陸などで3割超えに

在来木造住宅の耐力壁の種類で、構造用面材の割合が半数を超えたことが、住宅金融支援機構が公表した令和5年度【フラット35】住宅仕様実態調査報告で分かった。

同調査は、フラット35の検査を受けた全国の木造軸組工法の新築一戸建て住宅の仕様について、定期的に調査し、公表しているもの。今回、前回調査の平成29年から6年ぶりの調査結果が公表された。

同調査で構造用面材の割合が増加している。主な耐力壁の種類をみると、構造用合板などの面材の割合は59.8%と半数を超え、前回調査に比べ16.2ポイント増と大幅に増加した。筋交いの割合は40.2%だった。

面材の種類で最も割合が多いのが「構造用合板」で21.7%、次いで「MDF」が7.6%、「構造用パネル(OSB)」が6.0%と続く。一方で、構造用パーティクルボードが含まれるとみられる「その他の面材」は20.1%。

構造用合板の割合を地域別でみると、北海道が32.9%、北陸が30.9%と、この2つのエリアで3割超え。近畿も28.5%となっており、多くのシェアを得ている。

同調査では、2階床組合板の厚さについてもまとめている。結果を詳しく見ると、厚さ24mm以上28mm未満の合板の利用割合が年々増加し、今回調査では60.7%と6割を超えた。厚手化が進んでいる様子が伺える。

今知りたい情報がここにある

住生活産業のための情報プラットフォーム

Housing Tribune Online premium

ハウジングトリビューン オンライン プレミアム

https://htonline.sohjusha.co.jp/premium/